

---

# 僕の名前のヒミツ

K I D

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の名前のヒミツ

### 【Nコード】

N9907H

### 【作者名】

KID

### 【あらすじ】

ある日、僕は父さんに訊いてみた。『どうして僕の名前は、皆とは少し違う名前なの？』と……。その問い掛けを聞いた父さんは、僕にある話を聞かせてくれた。ある小さな少年の話を……。学校に行く途中で、思いついた話です。興味があったら、見てください。

ある晴れた日。

僕は父さんと河原に来ていた。

僕がそこに呼んだのである。

「それで？　なんだ、訊きたい事って？」

父さんが先に訊いてきたから、僕は言いたい事を言った。

「どうして僕の名前は、皆とは少し違う名前なの？」と……。  
父さんはその問い掛けに驚いたような顔をしていた。

「友達に言われたのか……？」

訊かれたけど答えない……。

確かに、友達にそう言われた。

別に僕はこの名前は嫌いじゃない……。

むしろ、気に入っている方だ……。

だけど、毎回毎回同じ事を言われ続けてたら、流石にこの名前が嫌になる。

それが怖かった……。

自分の名前を自分で嫌うのが、僕は怖かった。

父さんも、それは分かっていたらしい。

だからこれ以上何も言わなかったし、何も訊かなかった。  
代わりに言ったのは……。

「なあ……。父さんがこれから、お前に話してあげようか？」  
「何を？」

「探偵の話だよ」

「好きだね……。僕も好きだけど」

「丁度お前くらいの小さな探偵の話だよ」

「えっ？」

僕は耳を疑った。

僕は今小学１年生だ。

僕と同じ年の探偵なんて、あり得ない……。

作り話に決まってる……。

だけど父さんは……。

「これは実話だぞ」と言った。

こうして、父さんの話は始まったのだ。

まず最初に話してくれたのは、主人公の『S』という高校生探偵について。

その『S』という名前が、途中の場面の話で『C』に変わった。

なんでも、謎の組織に飲まされた薬で、体が縮んだんだって……。

「その少年『C』は、『S』は、知り合いの家にその日の出来事を全て話した。そして事情が全て分かった時に『S』の一番愛していた女性『R』がその知り合いの家に遊びに来てしまったんだ……」

「えーっ！ それ、大変じゃんか！」

僕は半分オーバーリアクションとも取れる反応をして、その話の続きを聞き直した。

その後の話がまた凄い・・・。

その『S』の知り合いは『R』に対して『この子をしばらくの間預かってくれ』って、頼んだんだって・・・。

理由は『Rの父親が探偵だったから』なんて、本当によくある流れ・・・。

でも、僕は納得できなかったよ・・・。

Rに『C』『S』だって、話さなかった事が・・・。

「どうして話さなかったんだよ！？ その『C』っていう人・・・。

一番好きな人だったのに・・・」

「話したくても、話せなかったんだよ・・・。一歩間違えたら、彼女も殺されるかもしれなかったから・・・」

「だからって・・・」

まだ納得できなかった・・・。

大切な人を、嘘で騙している事が・・・。

「その後『C』は何度も色々な事件を解決した。全部『R』のお父さんがやった事にして・・・。その内に、逆戻りした小学校で出来た仲間や、西の高校生探偵・・・。平成のアルサーヌ・ルパンと呼ばれ続けた怪盗にも出会った。だけど・・・、組織は中々見つからなくて、月日だけが流れた・・・」

「じゃあ・・・『C』はどうなったの・・・？」

僕がそう訊くと、父さんはしばらく黙り込んだ。  
一瞬凄く心配だったのだけど・・・。

「『C』が組織を発見したのは、もうじき一年になる、という頃だった・・・。『C』はその間に、西の高校生探偵と呼ばれた『F』と、大怪盗の『K』と共に、組織を追い掛けた」

「なんで、泥棒が仲間になってるの？」

最初に聞いて浮かんだ疑問だ。

「その泥棒も『C』と同じく、組織を憎んでたんだ。自分の父親を殺されたから・・・」

「それで仲間に・・・」

「うん・・・。だけど、最初は失敗した・・・。敵の策略も全然考えなかったから・・・」

つまり、甘く見過ぎたってことか・・・。

「それで？ それで？」

「・・・『R』に・・・『S』だとバレた・・・」

「（えっ？・・・）」

ずっと隠していた人間に、正体がバレた・・・。  
という事は、ずっと『C』が騙していたのも・・・。

「『R』は『C』にうつった……」

どうしていつも、一人で抱え込むの？

みんながどんなに心配してるか……。

少しは考えてよっ！？

それに・・・、私は前に言ったじゃない・・・。

『周りを危険に晒すなんて．．．、そんなの探偵のすることじゃないよ！』

$\tau$   
 $\cdot$   
 $\cdot$   
 $\cdot$   
 $\circ$

「その時に、初めて『C』は知ったんだ……。一人で抱え込んでたら、何も始まらない……。何も終わらなくて、何も解決できないって……。小さくなって……。初めて知ることが出来たってね……。」

一人で抱え込むな・・・！

僕の父さんの口癖だった……。

「……。。その後……？」  
「C」は「うん」

「いいや……。その後は、仲間の一人が元に戻す薬を作ってくれて、無事、元の17歳の高校生に戻れた……。ただ俺が言いたいのは、一人では何も……」  
「うまくはいかない……。だから、自分の周りに頼ってほしい……。でしょ？」

先が読めたから、父さんよりも先に言った。  
申し訳ないけど……。

「お前な……」

「僕、馬鹿にされたんだ……。名前……」  
「……………」

一人で抱え込んでちゃいけない……。  
だから言つたよ。

名前を訊いた理由……。

「ねえ……。父さん……」

「うん？」

僕は迷った……。  
だけど、訊いた……。

「父さんは……。母さんを騙してて、辛かった……。？」



しばらく静かになった。

川原で白い綿毛のタンポポが、次々に空に舞い上がる。  
その中で、父さんは言った。

「いつ気がついた？ この話が父さんの・・・」

「最初から。皆の名前がアルファベットのところで、すぐに分かったよ。皆の名前を言いたくないんだって事も・・・」

「流石・・・。未来の名探偵・・・」

父さんが苦笑いを浮かべた。

「ねえ？ 辛かったの？」

「そりゃ、辛いよ・・・。というより、悲しかったし、自分が憎たらしく感じた。今まで母さんを騙した事なかったからな・・・」

「もう騙さない？」

「ああ・・・。それだけじゃない・・・。もう離れないし、もう危険な目にも合わせない・・・」

おっ！ 確かに今言ったな・・・。  
それなら・・・。

「じゃあ、仲直りしてよ。知ってるんだよ。朝口喧嘩が大喧嘩になったの」

「・・・いつ？・・・」

「今日の朝。僕が朝起きたら、家の柱が2本折れてた・・・。この間コンクリートで壁直したばかりなのに・・・。夫婦は直らないの？」

「・・・」

父さんが渋い顔をしたまま、時計を見た。  
時刻はもうすぐ12時……。

「なあ。今日は仲直りも兼ねて、外で食べようか？」

「えっ？ いいの！？ やった」

「じゃあ……、家に誰が先に着くか、競争だな」

と言うや否や、父さんは僕を置いて走り出した。

タンポポの綿毛に紛れながら……。

「えっ？ ちょ、ちよつと待ってよ!!」

「ほら、早く来いよ！」

「待っててば!!」

僕は半分笑いながら、父さんと同じ様に走り出した。

もう僕は、自分の名前を皆とは違う名前だなんて思わない……。  
嫌いな名前とも思わない……。

むしろ『こんな事があったからなんだ』って、自慢できる。

『一番大好きな名前だ』って、胸を張って言える。

あの話を聞いて、僕は初めて分かったんだ。  
僕の名前のヒミツが……。

だって僕の名前は……。

『工藤コナン』って、言うのだから・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9907h/>

---

僕の名前のヒミツ

2011年11月12日01時40分発行